

政治・社会 1
国家

「国家」というのは不思議な団体です。

ふつうの組織は、その組織の構成員だけがメンバーですが、「国家」の場合、きちんと組織されている「政府」（狭義の国家）のほかに、その職員でないかなり多くの人間、つまり「国民」を合わせて成立している団体なのです。

この「政府」と「国民」との間にかつちりとした関係があるのが「国家」の特徴で、具体的には次の四つの点が挙げられます。第一に、税金を取ること。第二に、暴力を独占すること（警察や軍隊がこの「暴力の独占」にあたる）。第三に、立法権があること。第四に、領土をもっていること。これらによって「国家」は現状を維持する装置としての機能を果たすのです。では、この「国家」が成り立つ

ている範囲、すなわち領土の位置、形や広さ、他の「国家」との境界線はどのようにして決められたのでしょうか。

人為的に
つくられた
「国家」の
アンバランス

一般的に、民族や文化や伝統といったものがこれまで根拠とされてきました。「そこに住んでいるのがドイツ人だからドイツ国家をつくった」とか「代々フランス人が住んでいたからフランス国家になった」などという具合です。しかし、これは嘘です。実は、ドイツができたからドイツ人ができ、フランスにいたからフランス人と呼

グローバル
ゼーショー
ンの中で
起きた
同時多
発テロ
と
国家の
再定義

粹をかなぐり捨てたい人たちが少なくないのです。

今まで人間が作りだした観念のシステムで、現実を正しく反映しているものなど一つもなく、たいしてどこか間違っています。とはいえ、「国家」が存在すれば、現状維持の延長でしか現状を変革できません。「それじゃだめだ。まったく別なストーリーを作ろう！」と自分の観念に合わせて世界をつくり変えようとする人間も現れてきます。その極端な場合がテロリストなのです。

同時多発テロ
という新しい
戦争のかたち

2001年9月11日の米同時多発テロで私が注目するのは、ブッ

シュ大統領が極めて早い段階で「これは新しい戦争だ」と発言した点です。

テロは本来「犯罪」なのに、すぐ「戦争だ」と反応したのは、テロ支援国家に反撃戦争を開始することが念頭に置かれていたから、もっと言えば米軍の上層部の中に、この形のテロの可能性をすでに予測し、研究し、準備していた人がいたからでしょう。

同時テロの直前に出版された『軍事革命(RMA)』(中村好寿著、中公新書)は、湾岸戦争以後、軍隊が変質したのみならず、軍隊と国家、社会との関係が根本的に変わったと指摘しています。

具体的にはそれは「消耗戦から麻痺戦へ」という軍事上の変化を指している。消耗戦は敵の主力をたたく戦争で、空母機動部隊や機

ばれるのです。なのに、国語教育や国民規律を利用して、あたかも民族や文化や伝統が「国家」の根拠であるかのような幻想がつくり出されてきた。

そのような状況に対して「嘘八百だ！」と指摘するのが、構造主義以降の、最近のポストモダン系の「国家」の捉え方です。これはいちおう正しい。正しいのですが、「国家は幻想だ！」と何百回言っても現実の「国家」がなくなるわけではないのです。「お金はただの紙切れだ！」と何百回言っても、「お金」がただの紙切れにならないのと同じです。「紙切れがお金として通用している」というのが現実なのですから。

それと同じように「国家が存在している」というのが、この社会の現実なのです。「国家」は人為的につく

られたものです。アメリカもフランスもしかり。ソ連もそうでした。中でも先進国の勝手な線引きでできた旧植民地や発展途上国では、人為的ニュアンスが非常に強く感じられる。

たとえばアフガニスタンのような国の場合、生活の実態はそれぞれの民族や宗教で、その人たちが一つの「国家」にまとまることに合理性はありません。しかし、「国家」という団体を構成しないと先進国から対等な交渉相手として認めてもらえないという国際ルールがあるので、やむを得ず「国家」を作っているのが実情とも言えます。これは彼らにとって大変本意な状態で、できることなら「民族」とに独立したい!「ムスリム」として自立したい!などと、先進国に押しつけられた「国家」の

Hashizume Daisaburo

橋爪大三郎



東京工業大学大学院社会理工学研究科
価値システム専攻教授。
1948年神奈川県生まれ。
東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。
専門は社会学。
著書『橋爪大三郎コレクション』(勁草書房)、『政治の教室』(PHP新書)、『世界がわかる宗教社会学入門』(筑摩書房)、『はじめての構造主義』(講談社現代新書)など多数。

甲師団部隊、核兵器の撃ち合いなど、大量破壊兵器で大量に相手の軍人や一般市民までも殺害する。これは、さかのばればナポレオンの国民軍が登場して以来の伝統的戦争形態とも言えます。

一方、麻痺戦はコンピュータの発達と深い関係がある。現代は兵員と武器のすべての動きがコンピュータでコントロールされている。となれば、一番効率のいい攻撃は、敵の主力を攻撃することではなく、その中に隠れている「要」、すなわち弱点を突くことです。その弱点は軍隊の中にあるとは限りません。経済システムの中にあるかもしれないし、通信システムの中にあるかもしれない。政府の中核にあるかもしれない。そこを同時多発的に攻撃し、相手が立ち直れなくなるよう一撃、三撃と繰り返します。

この麻痺戦だと、極めて小さい攻撃力で大きな軍事力をノックアウトすることができ。これがコンピュータ時代の軍事革命の本質

AP/WWP



「われわれはまだ仲間を捜さなければならぬ」。
世界貿易センタービルの倒壊現場。

果、勝敗がついて戦争が終了し、平和が訪れる、という経過をたどる。このような戦争を起こさないのが、安全保障の基本でした。しかし、消耗戦が麻痺戦に変わると、巨大な軍事力、経済力、国力を持つている国ほど、それが崩壊した

場合の犠牲が大きくなる。つまり、大きな弱点を持つことになり、テロ攻撃を誘発してしまうのです。

これまでの「国家」のセキュリティは、国内では警察、国外では軍が責任を持ち、責任を持たなくていい多くの民間人は、普通に生活できていました。

ところが、民生で使われているコンピュータシステムと、軍で使われているコンピュータシステム

がまったく同じもので、しかもつながっているという現代の状況では、軍をテロ攻撃することも企業にサイバーテロを行なうことも、じつは同じことになる。つまり、軍事と軍事ではないものを区別する理由もなくなったのです。

防衛的国家連合がもたらす国家主権と人権の再定義

こういう状況をむかえると、テロリストを前に否応なく「国家主権」の再定義が必要となってきた。

テロが同時多発的、多国籍に行われる以上、国内においては国内警備にあたる警察と国防を預かる軍隊が協力する方向に向かわざるを得ません。また一國で防止できるものでもありません。「国家」と「国家」が相談して軍事同盟以上の協力関係を築き、国家間の情報ネ

未来社会への「知のシステム」の貢献

国家主権や人権の再定義が必要であれば、とうぜん近い将来、これまで不変のものと考えられていた「国家」自体の再定義も必要になるでしょう。

「哲学」は、このような状況に直面した際、役立つ知の技法であり、思考のシステムと言えるでしょう。人間の思考はこれまで人々が考えてきたパターンに拘束されます。ところが、事態や状況は日々変わってゆくの、過去の発想に拘束されているために問題が解けない

ということが起こります。このような場合は、過去の考え方の概念や発想を打ち破り、現実の再定義を行なうことで、状況に適応していかなければなりません。

哲学者は、人間が何をどう考えてきたか、どういう状況で新たな概念をつくりだしてきたのか、過去のそういう道具箱を持っている人だと言えます。現代のような時代の転換点にあつてこそ、状況に合わせて新たな「知のシステム」を構築し、それを提供することが、今後、哲学に最も求められていることなのです。

(インタビュ構成・佐保圭)

19世紀の概念的枠組みでは、国家「主権」とは独立最高の意思決定機関であり、これは「国家の上には何もない」という考えのもとに成り立っています。しかし、単に国家を防衛するだけでなく、「国

家連合」をテロリストから防衛するという多国連合ができた場合、それは必然的に「国家」よりも上位に位置する存在となるはず。人権に関しても同様です。「いかなる立法行為によつてさえ、否定できないもの」とされていたはずの人権が、テロリストが国民の中に存在する可能性が否定できない限り、「国民を外敵から守る」必要上、国家とその政府は、国民の人権の一部を「侵害」せざるを得ない状況に陥る。つまり、全世界的なテロリスト発見のネットワークの影で、プライバシーの侵害や個人情報への検閲など、人権とされてきたものが制限されていくことになりかねないのです。

共同幻想

気になる言葉

Hashizume Daisaburo

吉本隆明氏の「共同幻想」のアイデアは、かつて私を魅了した。この言葉は第1に、無文字社会にさかのぼる射程をもつ。第2に、個体幻想、対幻想とセットで権力の起源に遡及する性能をもつ。第3に、「真実」からの偏差を意味する「イデオロギー」のような、余計な含意がない、と思われた。第2の点は、近親相姦の禁忌や構造主義に興味をもつきっかけにもなった。「共同幻想」は、宗教のことだとも言える。外から見れば幻想だが、内からみれば現実そのもの。文明の衝突論は、地球上に分立する幻想(現実)同士の抗争である。こうした観念の共同性をうまく言い表す言葉を、フォーコーの「エピステーメ」やトマス・クーンの「パラダイム」などと独立に、1960年代に編み出した吉本氏の力量に敬服する。